

台北の孔子廟は大龍峒にあるが、ここは昔から文化的気風の盛んな土地で、「三歩行けば秀才、五歩歩めば挙人（どちらも清朝の高等文官試験合格）」とうたわれた。孔子廟は南向きに建てられ、後ろには大屯山を控えて、地勢を利し壮大な規模を誇っている。ここでは、萬仞宮牆とこれに対するそれぞれの建物の配置が見取れる。

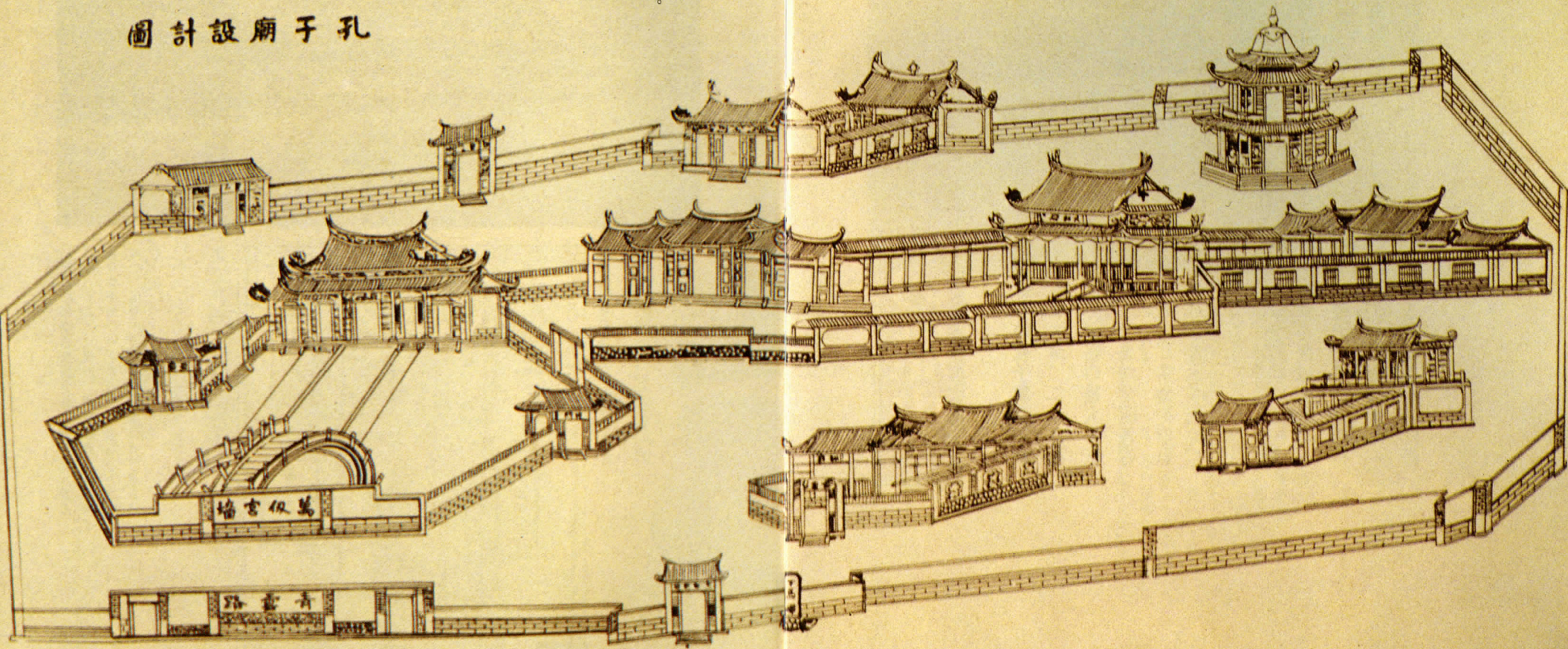
一、台北孔子廟の歴史

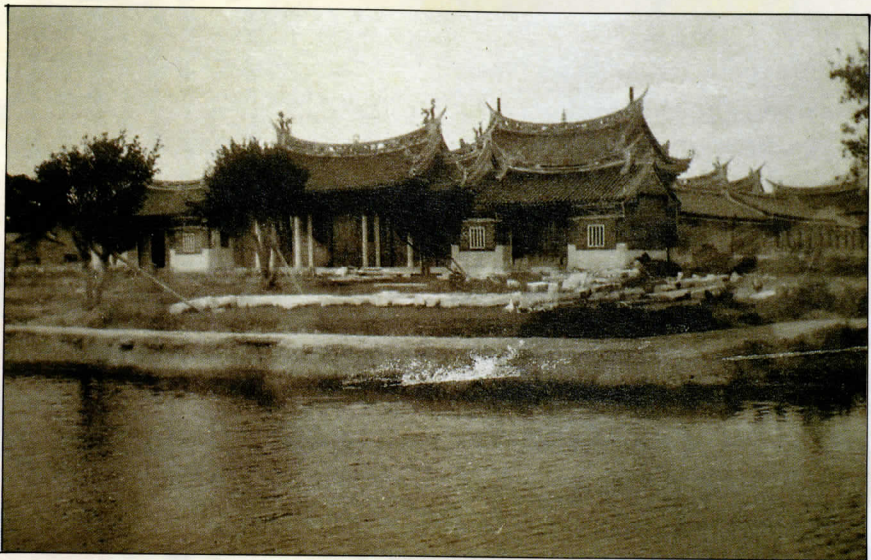
孔子廟は中国儒教文化の具体的象徴です。山東曲阜の孔子廟は中国最大で最古の孔子廟として一般によく知られておりますが、これは孔子の故居に始まるもので、二千年の改築と拡張を経て現在の雄大で壮麗な規模を備えるに至りました。この山東の孔子廟は、また全国各省の孔子廟のモデルとなっています。明清の時期になると、各地の府県などの都市には、おおむね孔子廟が建てられており、儒学と称されて地方教育の場としての機能も兼ね備えていました。

台北市の孔子廟の創建は、清朝光緒元年（西暦一八七五年）に台湾北部に台北府が設置されたことに始まります。府の中心区域が光緒五年（一八七九年）に建設を開始されたのに伴い、城壁で囲まれた都市の南門付近に文武の廟を建てることになりました。二つの廟はどちらとも南を向いており、孔子を奉る文廟は左、関羽を奉る武廟は右に位置

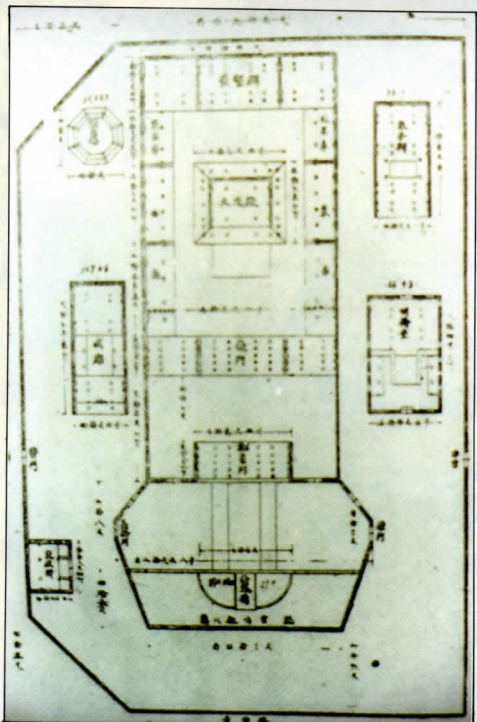
孔子廟設計圖

泉州の名匠王益順が描いた
台北孔子廟の設計図である。
図の中央が孔子廟の主軸
となるべき建築群で、
上は武廟及び奎楼、
下は明倫堂及び朱子祠
であるが、いづれもまだ
建てられていない。





一九三〇年頃に撮影された台北孔子廟の前面、写真には儀門・東西の廡・大成殿及び崇聖祠のみが見える。前はまだ空地で、櫺星門及び萬仞宮牆はまだ建設されていない。



台北孔子廟の当初の平面図。

しており、これが台北府の孔子廟の始まりとなりました。

台北府孔子廟の創建当初は、当時の台湾兵備道夏獻綸と台北知府(知事)陳星聚とが工事の監督に当り、光緒七年(一八八一年)には大成殿、儀門と崇聖祠とが完成しました。翌年、台北の名士たちが寄付を募り、札門、義路、櫺(れい)星門、泮(はん)池及び万仞牆(しゅう)などが建てられ、光緒十年(一八八四年)には相当の規模となりました。

その後、劉銘伝が台湾巡撫に任じられた時から、毎年定期的に盛大な儀式を催すようになり、台北の文人の重要な行事となりました。光緒一七年(一八九一年)に邵友濂が巡撫を引き継いでからは、福建にまで祭器や礼器の購入に人を派遣し、また礼や音楽の師を招いて、台北で教習を開始しました。

しかし、不幸な事件が続いて起りました。光緒二十年(一八九四)年に日清戦争が起り、その結果として台湾は日本に割譲されたのです。翌年、日本軍は台湾の占領を開始し、台湾の日本占領時代が始まりました。当初は、抗日の義軍が次々に蜂起し、日本軍は台北の孔子廟に

現在の孔子廟の主要な入り口である。門。これは典雅で美しい門の建築である。屋根は二重になっており、中央が門となり両側に円窓を開けていて、親しみやすい雰囲気である。



礼門を前から見る。礼門と義路は孔子廟の主要な殿堂の側門となっている。孔子への尊敬を表すために、孔子廟には正面の入り口を設けない。一般の人は、孔子廟参拝には、必ず礼門と義路から入る。



駐屯したため、孔子とその弟子の位牌の多くは壊され、祭器や楽器などは失われ、建物は次第に荒れ果て、毎年の祭典の儀式も中止されました。

光緒三十三年（一千九百七年）、日本人は日本語学校建設のために孔子廟を取り壊し、跡地を利用して第一高等女学校を建設しました。それからほどなくして、日本語学校の内部に小さな社が建てられ、孔子とその弟子の聖人の位牌が改めて祭られるようになり、毎年孔子生誕の日には社が開けられ、学校の先生と学生により祭礼が行われるようになったのでした。

中華民国六年（一九一七年）一月、台北の詩人節団体瀛社と大正協会のメンバーとが孔子を祭る崇聖会を組織し、日本人木村匠が会長、台北の名士顔雲年、李景盛が副会長に選出されました。これから毎年旧暦八月二七日の孔子生誕の日には、日本語学校の社から孔子の位牌をお迎えし、大稲埕学校や蓬萊女子学校、または万華の龍山寺、大龍峒の保安宮などで祭典を執りうようになりました。無論、主だった人びとは孔子廟の再建を主張しましたが、財政面の問題から再建を進め



萬仞宮牆は、一般の寺や廟にある照壁と同じ形式で、門前に屏風のように建てられる壁であるが、孔子廟には別の意味が込められている。論語の「夫子の牆や数仞、入るにその門を得ずば、宗廟の美を見ず」とある言葉から孔子の学問の深さ高さを形容している。

ることができませんでした。

民国十四年（一九二五年）、台北の名士黄贊鈞、陳培根、辜顯榮などが協議し、官吏・富商など二百人余りを招いて集会を開き、孔子廟の規模や寄付の募集方法などを決議しました。二月には台北聖廟建設準備会が設立され、寄付募集と建設の事務を取ることになりました。

失われて十数年の孔子廟が、ここについて再建されることになったのです。三月、大龍峒の地主陳培根は田地二千坪余りを寄付、辜顯榮も土地千坪余り、また別に田地千坪余りの購入資金を提供し、これらを合計した五千坪が孔子廟再建のための建設用地となりました。

土地と経費の目当てがつき、次は設計と施工者を捜さなければなりません。当時は、台湾には孔子廟建設の経験がなく、大陸から経験のある大工を招くことになりました。それより以前、民国九年（一九二〇年）には福建省泉州の名大工王益順が台北に招かれて、萬華龍山寺などの建設に携わり、多くの賛賞を得ていました。そこで、台北の孔子廟建設にも王益順が総督として招かれ、設計と建築を担当することになったのです。



萬仞官牆の内壁には麒麟が描かれ、足元には四つの宝物を踏んでいる。これは祥瑞と幸運とを象徴している。

洋池にかかる洋橋から樞星門を望む。洋池は孔子廟に特有のもので、その機能は寺や廟の前にある半月池と同じであるが、ここには洋宮の池という意味が込められている。中央を跨ぐ石の橋が洋橋である。



洋橋は、欄干には竹の節の形を採用して、節義を象徴し、欄干の頭は毛筆の形で、文運を表す。



王益順は泉州惠安泉溪底村の人で、清朝末期福建でもっとも有名な宮大工でした。廈門の南普陀寺もその手になるものですが、孔子廟建設に際しては、南中国建築のエッセンスを注ぎ込み表現したといえます。今日私たちが目にする台北の孔子廟は、典型的な福建南部の建築様式であるといえるでしょう。

台北の孔子廟建設開始の時、占いを見る風水師の鄭孝廉を招いて、地相を見てから、南北の方位を定めました。継いで民国十八年（一九二七年）に着工し、十七年（一九二八年）四月には大成殿の上棟式を行うことができ、さらに儀門も着工しました。十八年（一九二九年）大成殿が落成し、続く十九年（一九三〇）年には崇聖祠・儀門及び東西の廡（ぶ）が相次いで完成し、聖人孔子の位牌も新たに作られることになり、同年八月二十七日、中断して三〇年余りになる孔子生誕の記念祭典が、ついに執り行われることになったのです。

大成殿・儀門・崇聖祠三つの建物と東西の廡が落成してからは、寄付が滞りがちとなり、財政難からその後の建設工事は中断されました。民国二四年（一九三五年）、台北の名士黄贊鈞・辜顯榮などが工事の



樞星門は、孔子廟に特有の前門である。所によつては中国の伝統的な牌坊の形に作るが、台北の孔子廟では殿舎の形になっており、非常に雄大である。この写真は、門の梁の上に高く掛けられた額である。

再開を提案し、再び募金が始められ、材料を購入し、大工を集め始めましたが、この時には本来の設計者である王益順は泉州で逝去した後で、工事はやむなく台湾の大工に任せることになりました。まず、樞星門から着工され、礼門・義路・賢門・泮宮・泮池・万仞宮牆と再建が続きました。民国二十八年（一九三九年）にはすべての工事が終わり、現在見られる規模を備えるようになったのです。前後二回にわたる募金では二六万余元を集め、総面積は五千二百坪、建坪は一千四百坪です。

完成後数年で第二次世界大戦が勃発し、日本人は中国の古代豊かな祭典を禁止し、代わりに日本の靖国神社の祭礼を強制しました。しかし、これも一時的なことで、民国三十四年（一九四五年）台湾は中国に戻ったのです。

戦後すぐの時期は混乱が続き、祭典は中止されましたが、翌三十五年（三九四六年）には孔子生誕の記念祭典復活の為に、官民揃って台北崇聖会の再興を協議し、台北市長游彌堅が主任委員、教育局黄啓瑞び辜振甫とが副主任委員に選出され、毎年の祭典を主催することになり

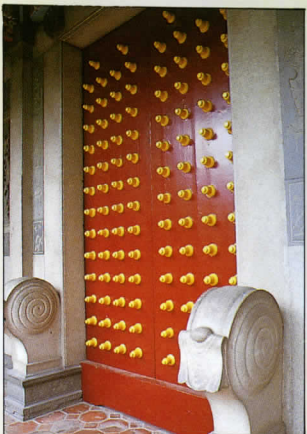
樞星門は、幅七間、中央には石の龍の柱一対があり、軒下には筒が列をなして、非常に装飾的である。



樞星門の龍の石柱は、龍の体が八角形の柱を二周りしており、変化に富み勢いがある。柱の下は海の波、上は雲を表し、また多くの人物の造形が点され、彫刻の手法は繊細で芸術的価値の高いものである。



櫺星門の門板には門釘が使用されて、突起状の装飾となっている。これは、城門に使用される鉄釘という装飾から変化したものである。この数は、門板ごとに五十四と定められ、両方で合計百八個ある。



櫺星門の中門左右には、抱鼓石が置かれている。これは一名を石球ともいい、形は大鼓のようで螺旋曲線の装飾が施され、前側には包巾が彫られる典型的な福建南部の様式である。



櫺星門には太い柱が林立しているが、これはすべて上質の泉州白石で彫られている。これらの柱は、簡素な優雅さを備えており、文字は刻まれていない。これも、孔子様の前で文章を弄ばないという古いしきたりに則ったものである。

ました。民国三十九年（一九五〇年）は孔子生誕二千五百記念に当たり、特に盛大に祭典が催され、当時の総統蔣介石先生は特に自ら筆を取り「有教無類」の額を寄贈されました。

民国四十年（二五一年）には関係者が台北市孔子廟管理委員会を組織し、台北市長呉三連が主任委員に選ばれ、通常の事務及び毎年の祭典などを行うことになりました。その後、民国六〇年（一九七一年）になり、民間の寄付により建設されたこの台北市孔子廟は、建設に功労があった台北名士の跡継ぎである辜振甫及び陳錫慶とが全体を代表して、国に寄贈されたのです。孔子の尊重は国の基本となる大事であると言うのが、その寄贈の理由でした。これを受けて、行政院（内閣に当る）は台北市政府に移管し、翌六〇年（一九七二年）七月、台北市孔子廟管理委員会が正式に発足し、民政局に属することになりました。これまでの歴史を振り返ると、清光緒七年（一八八一年）から数えて百年余りの歳月を経てきました。大龍峒の孔子廟は一九三〇年代に再建された物ですが、台北市民の孔子への尊敬は一貫して変わることなく続いていました。この精神が台北府孔子廟から台北市孔子廟へ

樞星門の木造部分の構造には、数層の梁木を使用して、堅固に作られている。大梁の下には鯨の形をした雲板があり、また獅子と象の形をした彫刻もあり、屋根の重量の支えとなることを象徴している。



儀門は大成殿の前にあり、また大成門とも呼ばれる。平常は閉ざされており、祭典の時だけ開かれる。左には金声門、右には玉振門があり、平常はこれを使用している。



と受け継がれており、私たちが台北市孔子廟を参観するときにも、これを忘れてはならないのです。

二、台北孔子廟の建築美術

民国一六年（一九二七年）に孔子廟の再建が開始された当初は、周到に考慮された再建プランが建てられ、規模も将来を十分に考慮に入っていました。中央の線に並ぶ主要建築は、順に万仞宮牆・泮池・櫺星門・儀門・大成殿及び崇聖祠と続き、東側には東廡・東庫、西側には西廡・西庫となっています。左側の空き地は、前に明倫堂、後ろは朱子祠に予定され、朱子祠の階上は朱子と文昌帝君を奉り、階下は図書館と予定されていました。右側の空き地には武廟を建て、武門の神様関帝を奉り、後ろには奎（かい）楼が高くそびえて魁星を奉る計画です。この文と武、孔子と関帝の廟を並べて奉り、さらに朱子祠と道教的色彩濃い奎楼を併せて建てるのは、前例のあることでした。台南